Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2026-11-27

地域エリートの類型化に関する一試論 : 篠山市同郷団体における「郷土」意識に着目して

奥井, 亜紗子

(Citation)
社会学雑誌,22:120-133

(Issue Date)
2005-03-31

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81011034

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81011034

KOBE UNIVERSITY

地域エリートの類型化に関する一試論

――篠山市同郷団体における「郷土」意識に着目して――

奥井　亜紗子
神戸大学大学院文化学研究科博士課程

はじめに

篠山は京阪神都市中心部から六〇キロ圏内にある兵庫県中東部の地方都市である。旧篠山藩域に重なる当地域は古くから独自の文化的基盤を持ち、また鉄道路線を町に通さなかったため隣接する三田市のような本格的なベッドタウン化をみず、そのため過疎化・高齢化といった問題を抱えつつも市街地は古くからの城下町の趣を残している。都市圏からのアクセスの良さから、黒豆等特産物やデカンショ祭りなどの知名度の高さも手伝って、人口五万人弱の当市には年間二〇〇万人を越える観光客が訪れており[1]、一九七〇年代以降の全国的な地方開発の波から距離を取った――あるいは取り残された――ことで、かえって独自の文化を保ちえた地方都市の好例といえる。

従来の都市社会学において、地域は、ある範域を居住地域とする一定の均質性を持つ住民を構成員とした自立的なものと仮定されてきた（西澤、一九九六：五三）。高度成長期における大量の人口移動は、それまで固定的・土着的とされてきた地域構成に「流動性」をもたらしたが（鈴木、一九七八：四二）、地域は依然としてある一定の空間的範囲をもって捉えられており、地域研究は基本的にその空間内に居住する人間と組織、そこでの相互作用に焦点を当ててきたといえよう。

しかし、地域のあり方を方向付けていく主体は、必ずしも地域内部に居住する住民や政策主体（行政）に限ったものではない。近代以降、大都市圏に人口を供給し続けてきた地方農村・地方都市は、地域外に拡散した同郷人から不断の望郷のまなざしを注がれ続けてきた。出身地を離れた人々は、転出先においては地域に愛着を持たない流動型住民として、その地域への包摂を課題とする存在と位置づけられるが、一方で、彼らは転出先においてもなお郷里に愛着を持ち、同郷者と集い郷里への関心

を維持し続ける存在であった。しかしながら、彼らの「郷土」意識は、神島の擬制村議論において過去の記憶への「退行」と否定的に表現されるように、これまであまり積極的な意味づけをなされてこなかったように思われる（神島、一九六一：一六九）。従来の同郷団体研究は、特定の地域に集住する同郷者同士の職や住の斡旋といった都市適応機能に着目したものが主流であった（松本、一九九三・山本、一九九四）。近年、こうした都市適応機能とともに同郷団体の親睦を通した文化的・心理的機能に着目するものが現れている。それらの先行研究において、離郷者の「郷土」意識は「ノスタルジア・ネットワーク」化する同郷団体の結合の核心をなすものとして（小林、一九九六）、あるいは離郷者個々人の生を確認し人生を意味づけるものとして評価されるものの、それが現実の郷里との関係性を構築する原動力とまではなっていないことが指摘されている（川村、二〇〇〇：二五七－二五八）。

しかし、拡散する同郷人の「郷土」意識は、たとえ郷里そのものに可視的な変化をもたらさなかったとしても、郷里に残る住民の「郷土」意識と交わることによって、その地域のあり方や文化に間接的な影響を及ぼすものである。本稿では、篠山という個性的な一地域のあり方を方向付ける主体として、篠山出身のエリート層による同郷団体――多紀郷友会――に着目してみよう。

多紀郷友会は、明治二四（一八九一）年に旧藩主青山家を中心として形成された篠山市（旧多紀郡）郷土関係者の親睦団体である。当地域の伝統的進学校である県立篠山鳳鳴高校出身のエリート層を主とする郷友会員には、東京・大阪をはじめとする大都市圏在住者と篠山在住者の双方を含み、会の中心活動である機関紙『郷友』の発行は、団体成立と期を一にして創刊された『多紀郷友会雑誌』に始まり、戦中戦後の休刊時代を除き毎月・隔月、あるいは季刊や年三回で発行され、今年度で四一〇号を迎えている。

本稿は、この多紀郷友会を空間的・歴史的広がりを持つ篠山エリート[2]の交流の場として位置づけ、彼らの重層的な「郷土」意識を手がかりに、篠山の文化を支える地域エリートについて考察するものである。はじめに第一節では、多紀郷友会と篠山エリートの歴史的な変遷を概観し、敗戦を機に「郷土」意識が郷友会の結合の要として浮かび上がってくる経緯を確認する。第二節ではアンケート調査の概要と調査結果から抽出した郷友会員の属性パターンについて呈示し、続く第三節ではそれぞれの属性によって異なる「郷土」意識の様相を考察する。最後に、第四節では、この「郷土」意識のあり方をもとに篠山エリートの四類型を試論的に提示し、地域エリート

の類型化を試みる。

一　多紀郷友会と篠山エリートの変遷

一―一　地域エリート集団としての多紀郷友会

多紀郷友会は、明治維新後上京した旧篠山藩主青山忠誠によって養育生として抱えられた旧藩士子弟らを中心に結成された同郷団体である。青山忠誠は赤坂の邸宅内に学生寮「尚志館」を建設するとともに、故郷篠山においても人材育成のための教育機関として藩校「振徳堂」を再建し、明治一九年には私立鳳鳴義塾（現在の県立篠山鳳鳴高校―以後「鳳鳴」と表記）を設立するなど、篠山出身エリート層の出世ルートの確立に多大な役割を果たした。多紀郷友会はその設立背景上、時代を通じて鳳鳴出身者が会員の大多数を占めており、現在も医者や弁護士、市会議員、また大企業ホワイトカラーのなかでも経営者や役員の割合が高く、肩書きなしでは多少敷居の高いエリート集団である。

従来の同郷団体研究において、エリート層によって組織される政治色の強い団体は県人会レベルに多く、それより狭域の市町村、郡、字などを単位とする郷友会は、戦後の産業構造転換にともなって故郷を離れた地方出身者の相互扶助や親睦を中心とする非エリート団体として、それぞれ異なった性格を持つものと考えられてきた（宮本、一九六四ほか）。

しかし、多紀郷友会は範域としては郷友会レベルの団体だが、職や住の斡旋といった相互扶助機能は特にみられず、会員の構成としては県人会レベルのエリート層である。そもそも、県人会は必ずしも設立当初から県人会であったわけではなく、その前身に郷土会・同郷会としての歴史があり、徐々に統合・再編成されたものであることが多い（園田、一九九二：二〇）。明治期の東京をはじめとする大都市圏において簇生した同郷団体に関しては、神島二郎［一九六一］の「擬制村」議論を筆頭に、竹永三男（島根、鳥取、愛知その他の各同郷団体）［一九八八］、河西英通（青森県青年会）［一九九二］、成田龍一（古河学友会）［一九九四］らによる研究の蓄積があるが、そこで取り上げられる同郷団体は県を単位にしたものと旧国や旧藩を単位にしたものが混在しており、出身地域の範域による結合形式や内容の差異は言及されていない。当時成立した同郷団体の特徴としては、①旧藩や旧国を単位とするものが多く、旧藩当主が同郷人の統合のシンボルとなること、②会誌発行を主要な活動とすること、③東京と郷里の連絡を目指し、在京会員と在郷会員の双方を含むこと、などが挙げられる。おそらく、一県一藩や一県一国であった地域は設立当初から比較的県人会という形式を取り、複数の国や藩を含むと

ころは同郷会から後に発展統合して県人会へと成長したものと考えられよう。

旧藩主を中核とした藩単位の同郷団体である多紀郷友会は、在郷会員と在京会員の双方を含み会誌を発行する、当時設立されたものとしては典型的な同郷団体である。ただし、本会はその後、県人会への発展・統合をみることはなかった。兵庫県は従来五つの国と一八つの小藩によって構成されており、県としてのまとまりを著しく欠いていたため、県人会の組織化が著しく遅れた経緯がある（壇上、一九七五：三九）。在京兵庫県人会は昭和五四（一九七九）年に組織されているが、多紀郷友会は県人会と特に連絡関係を持たず、時代を通じて篠山出身者独自のエリート団体として現在まで存続している。

一―二　結合志向の変化―中央志向から郷里志向へ―

次に敗戦を機とした篠山エリートの結合志向の変化について触れておこう。

戦前の多紀郷友会は、「国家に有用なる人材を育成」するという旧藩主の方針の下で、多数のエリート軍人を輩出している[3]。なかでも本会発起人の一人でもある本郷房太郎や本庄繁は篠山出身の陸軍大将としてシンボル的存在であった。多紀郷友会はそうした篠山エリートの集う場として求心的な役割を果たしており、『郷友』誌上には戦地に赴いた将校からの短信が頻繁に掲載された。設立当初は一五〇名足らずであった多紀郷友会の会員数は、両大将が最も活躍した日露戦争後の明治末期以降飛躍的に増加し、昭和一三（一九三八）年には最多の一一〇〇名超を記録している[4]。

ここには、維新の政変に出遅れた小藩の士族層が、中央支配機構参入の突破口を軍事部門に見出していった様子をみることができる。しかし篠山エリートの中央志向は、それが軍事方面に特化していたがゆえに、敗戦によって転換を迫られることになる。大戦後、維新以降戦前を通じて篠山エリートを牽引してきた青山家の存在感が急速に薄れると同時に[5]、会の中枢に位置したエリート軍人もまたシンボルとしての圧倒的な求心力を減少させていった。『郷友』は戦中・戦後の休刊期ののち在郷会員によって『丹波郷友』の名で復刊し、ほどなく東京に拠点が戻されるが、会員数は半減し「印刷屋に行く交通費も出ない」ほど財政状態は悪化する。

昭和四一（一九六六）年から約三〇年間にわたり『郷友』編集長を勤めたM氏は、少女雑誌の編集経験を生かして「素人編集」の一機関紙に過ぎなかった『郷友』のレイアウトや構成を大幅に刷新すると同時に、特に転出会員の「郷土」意識を刺激するという明確な編集方針によって、結合軸を失っていた郷友会組織の安定化に尽力

した。

「篠山を懐かしむという、やや感情面を私はネタにしたわけですよ。そのほうが、会員が増えると。（略）篠山なり多紀郡を愛して、懐かしんで、そしてその、いうなれば、そういうグループに沢山の会員を引っ張り込もうと、僕はそういうことを考えてた。」（聞き取り：二〇〇四・三・二四　前『郷友』編集長M氏　大正四（一九一五）生）

郷愁を前面に押し出し郷里を離れた篠山エリートの「郷土」意識に訴えるという戦略によって、会員数こそ大幅には増えなかったものの六〇〇名の大台を割ることはなくなり、また近年は会費の徴収状況も好転して毎年の繰越金が五〇〇万円を超えるまでになっている。

戦前の郷友会が、郷里出身の将校達を範とする後進の強い政治志向を軸とする場であったとすれば、戦後の郷友会は会員の「郷土」意識を不断に刺激することによって、篠山エリートの新たな結合軸を「郷土」篠山に見出したといえよう[6]。それは同時に、県人会レベルのエリート会員を有する郷友会が政治志向性を失い、中央から郷里へとまなざしの方向性を転換する過程でもあった。次節以降では、筆者が多紀郷友会編集部の了承のもと平成一六年度二月に行ったアンケートの自由解答欄から抽出した、現在の郷友会員の「郷土」意識を通じて、篠山エリートの存在形式を分析する。

二　調査の概要と郷友会員の属性パターン

二―一　アンケート概要と郷友会員の特徴

はじめに調査の概要と郷友会員の基本的な特徴を述べておこう。アンケートは郷友会員のうち非篠山出身者四〇名を除いた八三七名を対象に、郵送形式で実施した。回収率は六五・五％（五三七通）である。会員の約四割が現在も篠山に在住するため、離郷者と在郷者は別々の調査票を用意し、転出経験や家族生活等に関して質問した。郷友会員は個人単位であり男女比はおよそ半々であるが、回収した調査票では女性会員は一八・八％（一〇一名）と少ない[7]。入会資格は原則として篠山市出身および縁故ある者であるが、入会には会員の紹介が必要なため、伝統的に鳳鳴高校出身者が大多数を占めており、兄弟や親戚そろっての入会も多い。退会は自由で毎年二〇～三〇人の入退会があるが、会員歴二〇年以上の長期会員は三〇・三％（一六三名）を占め、中核会員は親子代々であることも多い。役職つきでの社会的地位の高い会員が主流であるため、年齢層は六〇～七〇代が中心となっており、五〇代未満は極めて少ないことも特徴の一つである。

二―二　郷友会員の属性パターン

篠山市には伝統的進学校である鳳鳴高校（現篠山鳳鳴高校―以後「鳳鳴」と表記）の他に、昭和八年（一九三三）年創立の農業高校（現県立篠山産業高校―以後「農高」と表記）がある[8]。農高出身会員は約九三％（五〇名）と少数であるが、その多くは地元で市会議員や役所幹部の地位にあり、会員のなかでも特徴的な出世コースを歩んでいる。

この出身高校と在郷／離郷の別を基本的な指標として、さらに在郷者には一定の都市生活経験の有無を考慮に入れて、以下のように会員の属性を分類した。

A.離郷エリート（鳳鳴＋都市在住）

鳳鳴卒業後、都市部に転出・定着した者。その大多数は大卒と高学歴であり、転出先でも官公庁や大企業の管理職、あるいは専門・技術系のホワイトカラーが多い。

B.地元エリート（農高＋篠山在住）

農高を卒業後、役場や農協、地元企業等に就職したり、農業を継承するなどして郷里に残った者。相対的には少数派であるが、地元青年団の後ろ盾を背景に市長や議会議員になるなど行政の有力者となっている。

C.在郷エリート（鳳鳴＋篠山在住【都市生活経験無】）

鳳鳴卒業後、郷里の自営業を継承したり役場勤務や教職に就くなどで郷里に残った者。前者は城下町地域に偏在し、後者は周辺農村部で兼業農家となるケースも多い。

D.帰郷エリート（鳳鳴＋篠山在住【都市生活経験有】）

Aと同様長期間都市部に転出していたが、転勤や定年退職の後に郷里に戻った者。数としては最も少ないが、近年徐々に増加しつつある。

三　「郷土」意識の重層性

三―一　離郷会員の「郷土」意識

離郷エリート（A）の多くは就学や就職を機に篠山を離れる。大学進学率が高く（七二・〇％）、転出時期は一六―一九歳に集中している（五七・六％）。転出先は大阪、京都、神戸など近畿地方に集中しているが（五八・七％）、関東地方にも約三割（三四・〇％）が転出している。離郷エリートの特徴はその階層の高さである。三割（三一・五％）を越える会員が経営者、役員の地位についており、また職種でも専門・技術系が約三割（三七・〇％）、管理的職業が約五割（四八・〇％）、と八割以上がエリートに分類されるホワイトカラーである。勤め先も一〇〇〇人以上の大企業が三割を超えており（三四・二％）、官公庁勤務も多い（二〇・四％）。地方都市篠山の一進学校が輩出した地域のエリートが、都市部においても相対的に高い階層に

参入していったことがうかがえる。

都市に軸足を置き年齢を重ねた離郷エリートにとって、郷友会の会員であることは、単にエリート集団の一員としての社会的威信にとどまらない意味を持つ（表A①）。離郷エリートが自身と篠山をつなぐ媒体（「糸」「メディア」）として郷友会を重視するのは、郷里と関わりを持ち続けたいという欲求に基づいているのは当然だが、その郷里が彼らのアイデンティティの拠り所となりえるだけのある種の「実力」を持つ、という点も見逃せない。

「丹波篠山と云うイメージが全国に広がっているので、郷友会の一員であることが一種の誇りと思えることもある」（七〇代）「出身地はどこですか、と来た時兵庫県では皆何の反応も示さないのに『丹波ささやま』と書いたり、云うだけで親しくコミュニケーションが出来、その親しさにも心がこもってくるので、最近は兵庫県とは書かず丹波ささやまにしています。」（六〇代）

離郷エリートにとっての「郷土」とは、単に自分の出身地であるという事実以上の、外からみたイメージとしての「丹波篠山」である。近年は黒豆や山芋といった特産物によって特にその名を知らしめた「丹波篠山」であるが、当地域は従来、デカンショ節とともに、田舎の代名詞として文学作品上にもたびたび登場してきた[9]。またその一方で、地理的に京都に近く京文化の影響を受けてきた「丹波篠山」は、山に囲まれた典型的な田舎でありながら、城下町周辺は文化的にも洗練された印象を持つ。篠山の文化度の高さは、豊かな「田園風景」に生きる「田舎者」というイメージと組み合わさった際の意外性によって、よりアイデンティ

表　会員属性と自由回答

	①多紀郷友会への意見	②多紀郷友会への意見
A	・（郷友会は）篠山市と私を結ぶかなり強力なメディアである（60代） ・今となっては篠山と私を結ぶ唯一の糸です（70代）	・道路が整備されて、昔の面影が消えてゆくのは淋しい（70代） ・篠山の都市化はのぞましくない！との思い切なるものがあります（70代）
B	・篠山鳳鳴高校の同窓会誌の様な気もする。もう少しバラエティーに富んだ誌を望む（70代）。 ・篠山出身者すべての情報誌としたい（50代）	・平成合併の優等生と言われる篠山市その名に恥じないように（70代）。
C	・（『郷友』の）篠山通信欄に市職員が執筆しているようですが、市にヨイショの記事ばかりでヨコから市政をみる必要があると思います（70代）。 ・篠山市の現状認識に甘く、記事に偏りがある。もっと現実をみつめるべきだと思う（50代）	・篠山に合併して中心が遠くなり不便だ（70代） ・若者がどんどん都会に出て老人ばかりになってしまっている集落を見ていると、ほんとに早急な対策が必要なのではないかと思います（60代） ・篠山を出た人も、篠山が昔のままであってほしいかもしれないが、篠山の都市化、発展をともに考え、喜べるようにしたいものである（70代）
D		・地域の行事が多く、地域の人との親睦は必要と思うが都会のほうが私は好き（70代） ・山国根性が強く・・・長く都会生活をしていたので調子が合わず、若干住みづらい（70代）

ティの拠り所として好ましいものと認識されるようである[10]。篠山を離れて外からの目で郷里をみる離郷エリートの「郷土」への関心は、彼ら自身の郷愁とも結びついており、それは時として郷里の都市化に対する否定的な態度を引き起こすこともあるようだ（表A②）。

三―二　在郷会員の「郷土」意識

B·地元エリート（農高＋篠山在住）

離郷会員は九割以上が鳳鳴出身であるが、在郷会員の約二割（二〇·六％）は農高出身者である。少数派の農高出身者にとって、多紀郷友会は現在も敷居が高いようである（表B①）。

農高出身会員の約半数（四八·六％）は公務員や農協等の団体職員であり、その多くは卒業後郷里に定着し、青年団幹部として地域の活動を中心的に担ってきた篠山現市長や助役、市会議員、市役所幹部などの現役あるいは引退した行政の有力者である。郷友会が依然として鳳鳴中心であるなか、農高出身の地元エリートは『郷友』誌上で市政の一端を紹介するほか、東京や京阪神各地で開催される「郷友の集い」にも顔を出し、「郷土」篠山の現況報告を行うのが町長時代からの定例である。行政有力者たちは、郷友会を篠山市にとっての「圧力団体」に近い存在として捉え、親睦と同時に市政に対して篠山エリートの理解を得るために会に参加している側面もみられる。

また地元エリートは一生活者として以上に、彼らの施策の対象として「郷土」をみる傾向が強い。自由回答欄における彼らの意見にはどちらかというと市の広報の文句に近い表現がみられる（表B②）。

C·在郷エリート（鳳鳴＋篠山在住[都市生活経験無]）

次に、篠山に残った鳳鳴出身者の意見を見てみよう。

ここでは目安として鳳鳴出身在郷者のうち、転出歴のない三九名と転出歴ありの会員のうち転出期間が一〇年未満の者三四名をこのCケースとして分類する。転出歴のある者の多くは、就学を機に都市部の大学に進学し、卒業と同時に帰郷するか、数年間都市の企業で働いた後に転職や郷里の自営業を継ぐ形で郷里に戻った者である。公務員・団体職員（二八·七％）、教職（二一·三％）なども目立つが、自営業が約三割（三三·三％）と最も多い。

篠山市民である在郷エリートは、『郷友』が行政の意見をそのまま掲載することには批判的であり（表C②）、合併後の市政への不満や、過疎化の進む現状への焦燥も目立つ（表C①）。

離郷エリートにとっては懐かしい「田園風景」も、そこに住む在郷エリートにとっては、過疎高齢化という喫緊の課題を抱えた生活の場である。彼らからすると、ただ郷愁の文脈で語られるだけの転出者の「郷土」意識に

は違和感があるようである（表C②）。

彼らの「郷土」意識が郷愁ではなく、一生活者として地域を担う当事者であるという自負を軸にしていることは、次のような意見からも推察されよう。

「多紀郡→篠山市へ一度もこの地域から離れた事なし、地域をまもるため一生懸命やって来た。個人的、又は仕事を通して、この地域は縁ある土地（地域）として守りたい」（五〇代）

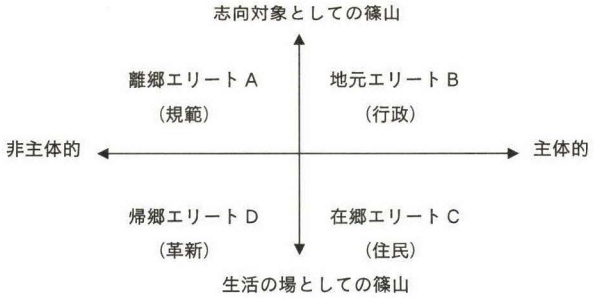

図　篠山エリートの４類型

D.帰郷エリート（鳳鳴＋篠山在住［都市生活経験有］）

しかし、同じ鳳鳴出身者の中でも、長年都市で生活し定年や転勤を機に篠山に戻った帰郷エリートの意見は、また少し異なった傾向を帯びる。ここでは転出経験ありの鳳鳴出身在郷者のうち、転出期間が一〇年以上の会員三五名をDパターンとする。

「長い都会生活で外からふるさとを観るようになった」（七〇代）帰郷エリートには、自身が地域の実質的な担い手であるという感覚が薄い（表D②）。彼らにとって、地元エリートや在郷エリートの声は、時として「個性のない小市民が井の中で真理を忘れ、大合唱しているお山の大将」（五〇代）と皮肉る対象にもなる。

しかしその一方で、帰郷エリートは、地域に生活する内側の目を持つ存在でもある。彼らにとっての「郷土」は、離郷エリートが「遠きにありて」思う対象としての「郷土」とは一致しない。離郷エリートにとっては好ましく思われる篠山の「田舎者」の側面も、長年都市生活を経験した帰郷エリートからは「山国根性が強い」といったように、否定的な表現で語られることになるのである。

四　篠山エリートの四類型

以上、郷友会員の属性パターン別に「郷土」意識の有り様とその重層性について整理してきた。篠山エリートは「郷土」意識を軸に結合するが、現住地や都市移動経験、出身高校などによって、その意識のあり方や郷里との関わり方は多様である。

最後に本節では、この「郷土」意識の多様性を参考に、篠山エリートの地域への関わり方（非主体的―主体的）を横軸に、「郷土」篠山をどのように捉えるか（志向対象としての篠山―生活の場としての篠山）を縦軸に、篠山エリートの四類型を提示しておこう（図）。

転出エリート（A）は若い頃に地域を離れている点で地域の具体的活動における主体的な担い手ではなく、外からみたイメージに依拠した志向（願望）の対象として篠山を捉える。地元エリート（B）は行政幹部の立場から地域の活動に主体的に関わるが、彼らにとっての篠山は施策という志向の対象の側面が強く、一生活者の視線とは一線を画したものである。一方、在郷エリート（C）は農業や商業の自営業者を含む地域活動の主体的な担い手であり、彼らにとっての篠山は純然たる生活の場である。帰郷エリート（D）は篠山在住である以上、生活の場として篠山を捉えるが、地域の活動に対しては現時点ではまだ主体的とは言い難い。

地元エリート（B）と在郷エリート（C）は「行政」と「住民」レベルのエリートであるが、地域に主体的に関わりえない離郷エリート（A）と帰郷エリート（D）はそれぞれ篠山にとっていかなる意味づけを持ちうるであろうか。

離郷エリート（A）は、自身の願望をもとに、在郷者にたいしてありうべき「郷土」像の遵守を求める。それは「都会に住んでいるとどうしても懐かしさが出てくるのは当然ですが…篠山を自らの行動で変えていくような姿勢が欲しい」というように、生活者であり地域の当事者である在郷エリート（C）の意識との剥離を生じさせることもあるが、他方で「多紀郷友会の皆様が、篠山を離れた目で維持すべき点、改善すべき点等を指摘してほしい」といった意見にみられるように在郷者への刺激ともなりうる。また市長をはじめとする地元エリート（B）は、都市部での「郷友の集い」に顔を出し離郷エリート（A）に対して市政の現状を報告している。それは「短くいつも中途半端に終わって」しまったり「単なる飲み会になってしまう」という幹事の不満はあるものの、くだけた場での屈託のない意見交換は[11]、地域外に拡散した離郷エリートが常日頃から「郷土」篠山の動向に着目していることを行政に実感させる貴重な機会でもある[12]。こうした点から、離郷エリート（A）は、篠山という地域を「規範」的な側面から担う存在と位置づけられよう。

転勤や定年退職後のUターン者を主とする帰郷エリート（D）は、現段階においては非主体的であり、A、B、Cいずれのタイプからも距離をとった傍観者的な立場にあるが、今後一定程度の増加が予想され、また期待もされている。離郷者と在郷者の双方の視線を持つ帰郷エリ

ートが、篠山のあり方に今後どのような影響を与えていくのか、その動向は注目される。一例を挙げれば、近年の篠山における里山保存の一環として、里山を公園化して自然体験学習の場としたり（篠山の森公園）、里山オーナー制度の実施といった試みがなされているが、それらの事業の担い手には都市部からのUターン者がみられる[13]。このように、都市と農村を架橋する、新しいタイプの地域事業を興していくという意味で、帰郷エリートは「革新」的な地域の担い手ともなるのである。

おわりに

以上本稿では、篠山の同郷団体である多紀郷友会会員の「郷土」意識を手がかりに、篠山という個性豊かな地方都市を支えるエリート層の存在形式について、主に都市移動経験をキーワードに分析を行った。多紀郷友会はその会員構成比上からも、離郷エリートの郷愁や外部の視線を意識した会誌編集をしているものの、そうした地域に拡散する離郷エリート（A）と地域内在住のエリート（BCD）の「郷土」意識をつなげ相互交流する場としての意義は大きい。

近代以降の日本において本格的に展開した農村-都市移動は、地域のエリート層を都市部に送り出すとともに、地域に愛着を持ちつつ外部から地域を見るまなざしを形成してきた。本稿で提示した篠山エリートの類型化は、地域エリート層が都市移動を経験する過程でこのまなざしを内面化することによって、従来地域の実質的な担い手として位置づけられてきた「行政」と「住民」に加えて、「規範」および「革新」的に地域のあり方を方向付けていく様相を明らかにする試論的枠組みである。この地域エリートの類型化が他地域のエリート層においてはどのように当てはまるのか、あるいは当てはまらないのか、さらに各象限に位置する地域エリートが具体的にどのような相互作用のもとで地域のあり方を方向付けていくのかに関しては、今後続稿を期したいと考えている。

註

（1）篠山は平成一一年度ダイヤモンド社によるベストシティランキングにおいて、経済性・快適性・成長度ともに「バランスのとれた地域」として全国八位にランクインしている。

（2）本稿では、地域の伝統的進学校出身の高学歴層と少数の農高出身の行政有力者を中心とする多紀郷友会会員を「篠山エリート」と称する。ただし「篠山エリート」は多紀郷友会員であることを意味しない。

（3）昭和一〇年度の多紀将校会会員数（現役、在郷、戦病没

会員含む）は二六八名、兵庫県出身大将二名は多紀郡が独占していた。大正一四年の多紀郷友会会員七五〇名のうち陸海軍将校だけでも一〇四名（予後備含む）であり、軍人志向の強さが伺われる（「旧帝国陸海軍郷友将星の群像」『郷友』第四一〇号）。

（4）「会と会誌の変遷（六）会員数の増減」『郷友』第三七四号　一九九三年

（5）その象徴的な出来事としては、青山家の財政的逼迫から、篠山（旧多紀郡）出身者の寮であった尚志館が、昭和三二（一九五七）年の建て替えを機に青山家の手を離れて兵庫県育才会の所有となり、兵庫県の学生寮となったことがあげられよう。同郷の先輩後輩による緊密な紐帯を育んだ尚志館も、対象を県内に拡大した結果、篠山出身の寄宿生は毎年一、二名程度に落ち込んでいるという。

（6）現在の『郷友』発行人であるH氏は、戦前から戦後にかけての郷友会の変化を、「同志的結合から郷里に求心力を置く開かれた郷友会」への転換であり、「脱青山色への過程」と表現している。（「創刊一〇〇周年記念エッセイ」平成三年『郷友』第三七四号）

（7）女性会員はほぼ一〇〇%が鳳鳴（旧篠山高等女学校）出身である。離郷会員のほとんどは結婚を機に転出し、全体的に専業主婦となっている者が多いため、篠山エリート層に着目する本稿の議論では、基本的に女性会員を分析の対象としていない。

（8）大正九年に県立鳳鳴中学校となった鳳鳴義塾は、昭和二三年戦後の学制改革で大正一一年創立の篠山高等女学校と合併して共学化し、県立篠山高等学校（昭和三一年篠山鳳鳴と改正）となる。一方農業高校は昭和八年組合多紀実業高等公民学校として出発し、学制改革によって県立篠山農業高等学校となるが、昭和三八年に産業高校に名称変更しており、現在は農業科は存在しない[天野、一九九一：二四七]。

（9）一例を挙げれば、夏目漱石の『我輩は猫である』では、主人公宅の庭に入ってきたボールを取りにきた田舎丸出しの屈強な学生達を「丹波の國は篠山から昨日着し立てで御座ると云はぬ許りに」と表現している。「黒く逞しく筋肉が発達して」おり、「中学抔へ入れて学問をさせるのは惜しいものだ。」といったくだりは、外の人間がどのように篠山の人間をイメージしているのかがうかがわれて興味深い[夏目、一九三八：三八七]。

（10）筆者がインタビューした離郷会員の多くは、自身や篠山を表現する際に、好んで「田舎者」「農民感覚」「垢抜けしない野暮」といった言葉を用いる印象があったが、これは彼らの謙遜というよりは、むしろ強い誇りの裏返しの表現とみるべきであろう。

（11）聞き取りでは、このような場における離郷エリートのア

イディアが市長の耳に入り、政策に影響を与える場合もあるという。関東在住の離郷会員で元大手貿易商社役員のN氏は、長年外国諸都市を周るなかで以前から篠山武家屋敷通りの無電柱化工事を希望していた。N氏の聞き取りによれば、数年前「郷友の集い」の席でN氏の話を聞いた現市長が挨拶で無電柱化の実現を約束したという。

「この、東京の、集いのときにね。まあお酒が入ったもんだからわいわい言いながら。うん。で、Sさん（現市長）横におって（N氏の無電柱化の）話を聞いてたらしいのよ。でいきなり挨拶で、『なんだNさんこんなこと言うとるけど…』いうて、（無電柱化を）ぽんと約束しよったわけ。」（聞き取り：二〇〇四年三月二五日）

篠山市は二〇〇〇年度から伝統的建築物群保存検討委員会を発足させ、二〇〇三年度には伝統的建造物群地区条例を制定して指定に向けて動き始めており、無電柱化工事もその一環として議論されている。インフォーマルな「お酒の席」における会員同士の交流が、直接的間接的に篠山市のあり方に影響を与えている様子がうかがえよう。

(12) もっとも、長男などで跡継として家を守るために地元に残り、青年団活動や行政の仕事を一手に引き受けてきた農高出身の地元エリート（B）にとって、就学や上京の機会に恵まれ若くから郷里を離れた離郷エリート（A）に対する心境は複雑である。そうした背景を鑑みた場合、重層的な「郷土」意識の相互交流は必然的にある種の緊張を伴うものであることは推察される。

(13) 里山オーナー制度とUターン者に関しては、地域社会学会の杉本報告（二〇〇四）による。

文献

天野郁夫編、一九九一、『学歴主義の社会史――丹波篠山にみる近代教育と生活世界』有信堂公文社。

越川次郎、二〇〇二、「同窓会と故郷――在京汽仙沼高校同窓会の事例から――」松崎憲三編『同郷者集団の民俗学的研究』岩田書院。

神島二郎、一九六一、『近代日本の精神構造』岩波書店。

河西英通、一九九二、「在京青年会の位置と論理」馬原鉄男・岩井忠熊編『天皇制国家の統合と支配』文理閣。

川村清志、二〇〇〇、「故郷を紡ぎだす同郷団体－七浦小学校同窓会を事例として」福井勝義編『近所づきあいの風景　つながりを再考する　講座人間と環境八』昭和堂。

小林多寿子、一九九六、「都市におけるノスタルジア・ネットワーク」『統計』。

松本通晴、一九九三、「都市移住と結節」松本通晴・松木恵佑編『都市移住の社会学』世界思想社。

松崎憲三編、二〇〇二、『同郷者集団の民俗学的研究』岩田書院。

宮本常一、一九八四、『民俗のふるさと　宮本常一著作集三〇』未来社。
夏目漱石、一九四七、『漱石全集第一巻　吾輩は猫である』岩波書店。
成田龍一、一九九八、『「故郷」という物語――都市空間の歴史学』吉川弘文館。
西澤晃彦、一九九六、「『地域』という神話――都市社会学者は何を見ないのか？――」『社会学評論』一八五号　日本社会学会。
祖父江孝男、一九七一、『県民性』中央公論社。
園田茂人、一九九二、「日本的〈擬似地縁結合〉の現在――在京県人会組織に関する調査結果から（上）――」『紀要（社会科学科第二号）』一四七号　中央大学文学部。
鈴木広編、一九七八、『コミュニティ・モラールと社会移動の研究』アカデミア出版会。
竹永三男、一九八八、「同郷会の成立――一八八〇～一八九〇年代における同郷人結合の結成――」高井悌三郎先生喜寿記念事業会編『歴史学と考古学：高井悌三郎先生喜寿記念論集』真陽社。
檀上重光、一九七五、「兵庫県人会」『地域史研究－尼崎市史研究紀要』尼崎市史編集室。
山本正和、一九九四、「都市の同郷人関係と同郷団体」松本通晴・丸木恵佑編『都市移住の社会学』世界思想社。

付記

多紀郷友会アンケートの実施にあたっては、多紀郷友会編集部および会員の方々に多くのご協力をいただきました。特に『郷友』編集に関してお話を伺わせていただいた前編集長森田淳二郎氏、現編集長山口博美氏、およびアンケート作成等で度々ご相談させていただいた尚志館館長の梶原暁氏には大変お世話になりました。皆様のご厚意に感謝いたします。

追記

本報告は、平成一三～一六年度科学研究費補助金基盤（A）（一）一三三〇一〇〇八「都市のユニバーサリズム、ナショナリズム、ローカリズム―都市の本質的なりたちに関する基盤的研究―」（研究代表　浅野慎一：神戸大学）の一環として行なっている共同研究（研究班長　佐々木衛：神戸大学）の成果にもとづく。